

マックス・ヴェーバー

——学術的社会調査の先駆者——

村上文司（釧路公立大学名誉教授）

マックス・ヴェーバーを「社会調査の達人」と呼ぶことに意外性を感じる人は少なくないだろう。しかし、ヴェーバーは、学問的生涯を通じて、同時代の社会調査を「学問の軌道」に乗せるという一貫した観点から、アカデミズムの世界で多様な社会調査活動を活発に繰り広げた学術的社会調査の先駆者である。

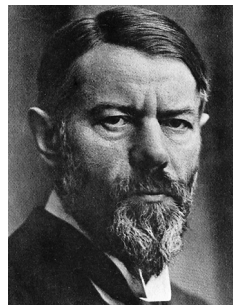
1848年の三月革命前後からヴァイマル共和国が崩壊する1933年までのドイツでは、社会調査が「アカデミズムの内外」で隆盛し、「経験的社会学」の生成を促す数多くの出来事が発露する（拙著、2005、『近代ドイツ社会調査史研究——経験的社会学の生成と脈動』ミネルヴァ書房）。

19世紀中葉の大陸ヨーロッパでル・プレーやエンゲルが開始した現地調査や統計調査は、世紀転換期のドイツに広がり、神学徒のゲーレは工場内での観察に、ベルリン大学のブランクは社会民主党投票者の社会的構成に関する統計の「二次分析」に、素人のレーフェンシュタインは労働者の希望や願望を尋ねる大量の社会心理学的アンケートに着手した。また同時期、クレペリンはハイデルベルク大学で作業曲線に影響を及ぼす精神物理学的要因を探求する実験に、ツァイス光学工場の経営者アッペは労働時間の短縮に関する工場実験に着手した。

これら新試行の調査が隆盛する当時のドイツで、ヴェーバーは、社会政策学会の農業労働者調査の報告書の執筆、ゲーレの直接観察の擁護、福音社会会議の農業労働調査の指導、教派と資本主義の精神に関するアメリカでの人間観察、ブランクやレーフェンシュタインの調査に対する助言、実験心理学の方法や成果の応用を考慮した織物労働調査、社会政策学会の工業労働調査やドイツ社会学会の新聞調査を企画した。また晩年、彼は戦時体験に基づく恤兵機関のモノグラフの執筆やミュン

ヘン大学に開設した社会学ゼミナールにおけるバイエルンの革命政府に関する質問紙を用いた学位論文の指導に着手し、絶筆となる『社会学の根本概念』に社会調査と社会学の密接不離な関係を明示する叙述を残した（拙著、2014、『社会調査の源流——ル・プレー、エンゲル、ヴェーバー』法律文化社）。ヴェーバーは、同時代の社会問題に立ち向かう「現実科学」に「正確な観察素材」を提供する社会調査の学問的な彫琢を意図し、アカデミズムの世界で、伝統的アンケートの改善、大量の質問紙の加工や分析の仕方に関する思索、調査の環境や倫理を考慮した工業労働や新聞に関する質と量を併用する大規模な学術調査の企画立案、調査研究機関の設立や調査家の専門性の確立を企図する学会活動を熱心に繰り広げた。

彼の「神経症疾患」は福音社会会議の私的アンケートの編集作業を妨げ、レーフェンシュタインとの共同作業は調査目的や素材の共有問題に遭遇する。また「迎合教授」や「名士の集団」との確執は2つの学会を舞台とする学術的な社会調査の進展を阻む障壁となり、中絶した出来事は、ヴェーバーの調査活動を相互に関連する学問的な営みとして再発見することを妨げた。けれども、ヴェーバーは、社会調査を基盤とする社会科学——彼は晩年それを「経験的社会学」と呼んだ——の創造を企図し、所属学会や社会科学雑誌あるいは大学を舞台にして、質的調査と量的調査の混合や調査家の資格をめぐる論議など、今日の学術的な社会調査の隆盛に先鞭をつける多様な活動を繰り広げた「調査の達人」だといわなければならない。



尾高 邦雄

吉村治正（奈良大学社会学部教授）

日本型経営の提唱で知られる尾高邦雄が標本調査をわが国の社会学に導入した立役者であることは、意外と知られていない。さらに知られていないのは、彼自身は標本調査よりもフィールドワークを好む調査者であったという事実である。

尾高邦雄は1932年に東京帝大文学部を卒業し、同大学の副手・助手・講師を経て45年に同大学助教授となっている。つまり戦争の期間を東京帝大の社会学研究室で過ごした。戦時中の日本社会学では、若手の研究者が占領地・植民地へ派遣されフィールドワークを行うことが多かった。たとえば秋葉隆の朝鮮巫俗の研究や岡田謙の台湾高砂族の研究、清水盛光の中国農村研究など。とくに中国農村の研究は盛んで、清水だけでなく牧野巽・林恵海・福武直らも同じ時期に中国農村でフィールドワークを重ねている。こうした活動は当時の国策によって後押しされたもので、それまで研究室でウェーバーを読みふけていた尾高も、海軍の委託として海南島に赴き、現地でのフィールドワークに従事させられている。

この委託調査の際に、彼は海南島海口市の少史街と呼ばれる一角に立ち寄り、ここで働く手工業者の調査を行った。職人の徒弟関係ならびに相互扶助組織に着目したこの調査は、通訳を介し、しかも調査期間がわずか5日間という短いものであった。にもかかわらず、この経験は彼に強烈な印象を与え、後の調査研究の方向を決定づけた。帰国後すぐに島根県出雲地方の「たたら吹き」事業者のフィールドワークを行い、終戦後も中野卓や松島静雄らを伴い埼玉県川口市の鋳物業者の調査に携わっている。これらはすべて少史街調査の延長線上にある。

とくにこの「たたら吹き」事業者の調査で高い評価を得た尾高は、1951年の世界社会学会議に派遣され、ここで国際社会学連合（ISA）の企画

する国際共同調査プロジェクトを持ち帰った。この調査プロジェクトの報告が、1953年に『社会学評論』に掲載された「わが国六大都市の社会的成層と移動」。つまり尾高が持ち帰った調査プロジェクトというのが、後に60年に渡って継続されることになるSSM調査である。この六大都市調査は日本社会学会が調査主体となり、社会学者のみならず社会心理学者や統計学者も含め50名以上が参加した。これほどの規模のプロジェクトを社会学会が抱えたことは、戦前まで振り返っても例がない。また、技術的要求の高い標本抽出を伴う調査を日本の社会学者が経験したのは、これが初めてであった。この点で、この六大都市調査は戦後日本の社会学における標本調査の出発点とみなしうる。

尾高の調査の特徴は、貧困という概念を中核に据えない点にある。海南島の少史街で、10人以上の職人が狭い作業場に住み込んでわずかな賃金で早朝から深夜まで働き続ける状況であっても「働く彼らの表情は楽しげに見える」ことに強い衝撃を受けたことから、尾高の調査研究は始まった。そのため、人を働くことへと向かわしめるものは何か、という問いかけが、常に彼の調査の中核に置かれていた。それが「たたら吹き」事業者では伝統的習俗であり、鋳物業者では事業主と労働者の個人的関係であった。このことは、戦前の社会調査の主潮流、つまり社会政策学会のもとで発達し磯村英一の都市下層調査や三好豊太郎の若年労働者調査へと結実した階級論的な社会調査とは根本的に異なる社会調査を、結果として戦後の日本社会学にもたらしたといつてよい。社会調査という観点からみて、尾高邦雄は二重三重の意味で戦後日本社会学の出発点なのである。